

悪女と呼ばれた聖女が
聖女と呼ばれた悪女になるまで

渡里あずま





悪女と呼ばれた聖女が、聖女と呼ばれた悪女になるまで

渡里あずま

序幕

アリスは、思う。生まれたのが今で、本当に良かったと。

まず、ランプのおかげで寝る前まで本を読むことが出来る。おかげで、遠くが見えにくくなり授業中は眼鏡をかけているがその眼鏡も、普通に買うことが出来る。

それに昔と違って、平民で女性の自分でも学校に通っている。更に、流石にお酒の出る店は無理だが女友達、あるいは一人だけでお茶を飲んだり食事をしたりすることが出来る。

……これらは、どれも祖母の若い頃までは出来なかつたそうだ。

（異国の本が読めるのは、父さんのおかげだけ……図書館もあるし、平民でも入れるもの）

あと、アリスは自分の生まれにも満足している。

平民だが、商人の家に生まれたので衣食住に困ったことはない。更に、跡継ぎである兄がいる。両親は好きな相手と幸せになれば、と言ってくれるが、そもそもそういう相手がいない。だから家族に勧められた相手に嫁ぐか、勉強したことを活かして働くかだろう。

「そう、わたしは今と未来でいいの……それなのに、どうして過去を振り返らないといけないのよ!？」

そう言い捨てると、アリスは机に突っ伏した。

潰さないように気をつけたが、そんな彼女の横には図書館で借りてきた本が数冊、積んである。学校の宿題で、偉人の伝記を読んで感想文を書かなくてはいけないのだ。

「本が好きだから楽勝なんて言われるけど……伝記だけは、苦手なのに。何か皆、出来すぎて言うか、持ち上げすぎなんだもん……特にこの、悲劇の王妃アデライトとか」

ため息と共に、アリスは一冊に手を伸ばし——そのまま読まずに、八つ当たりのように枕にした。

王妃アデライトのことは、読まなくても何となくは知っている。国の、そして民の為に力を尽くしたが、最期は革命により斬首されるのだ。しかし遺されている王妃の言動は、アリスにはどうもその場しのぎの綺麗ごととしか思えなかった。

「飢饉とかで、苦しかったって言うから……綺麗ごとでも、縫っちゃったのかなあ……？」

……そんなことを考えながら目を閉じているうちに、アリスは眠りに落ち——そして、不思議な夢を見た。

※

「……っ!？」

「アデライトお嬢様!？」

声にならない悲鳴を上げ、目を覚ますと聞き覚えのある声に呼びかけられた。

「今、旦那様をお呼びしますっ」

「あ……」

何だか若く見える侍女が走り去るのに、声をかけようとして——いつもと違う、高い声に戸惑う。そして顔にかかる髪を払おうとして、その小ささにギョツとした。

そして慌てて飛び起き、鏡に映る姿を見て愕然とする。

「……………わたくし?？」

ゆるやかに波打つ銀髪に、青い瞳。自分の顔ではある——あるのだが、どう見ても七、八歳だ。アデライトは十八歳の筈なのに、どういうことなのだろう？

(そう、それに)

学園の卒業パーティーでアデライトは糾弾され、捕らえられた後に処刑された。
浴びせられる罵倒。

投げられる石。

……そして断頭台の刃により、アデライトは首を落とされた筈なのに。

(確かに、覚えているのに……あんなに生々しかったのに、夢だったと言うの?)

侮辱

そう、アデライトは十八歳だった。

貴族の令息令嬢が通う王立学園を卒業した後は、婚約者——いや、妃として王太子であるリカルドを支えることになっていた。

……しかし入学してから今まで、アデライトはほとんどリカルドと話せていない。

同じクラスで、昼食も一緒に食べている。だが、リカルドは同席しているサブリナとばかり話して、アデライトには一瞥すらしない。

「亡霊みたいに辛気臭いお前の話など、つまらない。母上がうるさいからいてもいいが、黙っている。サブリナと話す方が、有意義だ」

入学して間もなくそう言われてからずっと、アデライトはリカルドに無視される状態が続いていた。

ゆるやかに波打つ白銀の髪と、透き通った青い瞳。幼い頃、両親が「月の妖精のよう」と称してくれた容姿は、けれどリカルドのお気に召さなかつたらしい。「亡霊」と言われ続けたせいでアデライトは自信を失い、長い髪で顔を隠し黙って俯くようになった。

一方、一年生の時にリカルドの隣の席になったサブリナは、光を思わせるサラサラの金髪と宝石のように鮮やかな緑の瞳の持ち主だった。黒い髪と瞳のリカルドと並ぶと、光と闇の一对のようで本当にお似合いである。更に彼女は外交官の娘であり、その美しさだけでなく話題も豊富だ。しかし、流石に二人きりで会うことは出来

ないので、アデライトもリカルドの側近兼護衛達と共に行動『だけ』していた。

(……お父様には、相談するべきなんでしょうけれど)

言えなかったのは、己の力不足が招いた結果を知られるのが怖かったせいもあるが——今の彼女は、そもそも父とまともに話せない。幼い頃に母親を亡くしているからと、婚約が決まった八歳の時からずっと、令嬢教育と妃教育の為に王宮で暮らしているからである。

一方、父・ウィリアムは財務大臣を務めているので、王宮に執務室を持っている。そしてほぼ毎日、出勤している。しかし、いや、むしろだからこそ、アデライトは自分から父に会いにいけないかった。仕事の邪魔をしたくなかったからである。

だが、今回はどうしても父と直接、話をしなければならぬ。それ故、アデライトは先触れを出し学校から戻った後、父に会いに行くことにした。

……今、この国は昨年の猛暑と嵐。更に虫害により、深刻な食料不足に陥っている。

苦しむ民の為、アデライトは考えた。そして、自分に割り振られている王室助成金を使えないかと思いついた。(今までは未成年だったけれど、王立学園を卒業したら一人前だわ……少しでも国の、民の為になれば)

そう思い、執務室で父に己の考えを打ち明けたのだが——返されたのは、思いがけない言葉だった。

発覚

王室助成金とは、その言葉通り王族を援助する為の資金である。

それ故、王太子の婚約者であるアデライトにも割り振られている。しかし、未成年である彼女は人前に出ないからと最低限の購入しかしていない。だからこそ、少しでも民への支援に使えたらと思ったのだ。

だが、しかし。

「……私の助成金が、ない？」

「ああ」

父からの答えを、アデライトは呆然としてくり返した。そんな彼女に頷いて、父であるウィリアムが言葉を続ける。

「リカルド殿下から、届けが出ている。直接は言い難いからと、お前に頼まれてドレスや宝石を買っていると」

「そんな……、私はっ！」

アデライトは、そんなことなどしていない。更に、リカルドからドレスなど贈られたことは一度もない。

（私の助成金を、勝手に使い込んで……一体、何を……）

ありえないことに、血の気が引く。

だがここ数年、アデライトはまともに父と話していない。そうなると、自分の言うことなど信じて貰えないのではないだろうか——リカルドの側近達や学園の生徒達のように、あからさまにはないが失望され、見下され

るのではないだろうか。

そう思い、父の顔を見られなくて俯いたアデライトに、声がかけられる。

「解っている」

「……えっ……?」

「お前は、教会や孤児院に寄付をしているだろう？ 出かける姿が執務室から見えるが、着ているドレスは……流石に季節ごとには変わるが、同じものだ」

「……お父様」

「学園での話も、聞いている。火遊びだとは思いますが、使い込みも含めて卒業後に席を設けて話そう。学生のうちでは、陛下達を巻き込んでしまうからな……それよりもその様子では、一週間後の卒業パーティーで着るドレスも用意されていないんじゃないか?」

「それ、は……でも、ドレス自体はありますし……私のようなものが、変に着飾るのも……」

「アデライト」

知られていたことは情けないが、ウイリアムからの言葉に安堵した。そんなアデライトの両頬が、父の手に包まれて視線ごと上向かされる。

「今までお前に任せきりで、本当にすまなかった……どうか、ドレスを送らせてほしい。オーダーメイドでなくて、申し訳ないがな。針子も、手配する……大丈夫だろうか?」

「お父様……十分です。ありがとうございます」

アデライトと同じ、白銀の髪と青い瞳。普段、あまり喜怒哀楽が表に出ない父だったが、かけられた声からは

微かに、けれど確かにアデライトに対する気遣いが感じられた。

（王妃様や侍女達から、殿方の仕事を邪魔しないよう言われていたけれど……思いきって、話をして良かった）
 ぬくもりと共に伝わってきた気持ちの温かさに、我慢出来ずに声が震え——アデライトの瞳から涙が一筋、また一筋とこぼれ落ちた。

急転

こうして、アデライトは父・ウィリアムから贈られた青いドレスに身を包み、学園内の大広間で行われる卒業パーティーに参加した。

リカルドのエスコートは断られていたが、会場では保護者として父が待っていてくれる。だからアデライトは一人、パーティー会場へと向かったのだが――。

「アデライト・ベレス！ 王太子である私の婚約者という地位を笠に着た暴虐、もはや看過出来ん！ お前との婚約は今、この場をもって破棄とする！」

「っ!？」

貴族の令息令嬢が通う学園である。それ故、生徒達の保護者達や国の重鎮。他国の大使を招いて開かれたパーティー会場に響き渡ったその声に、居合わせた者達は息を呑み、何事かと目を向けた。

視線の先には、声の主である王太子・リカルド。その背後には数人の側近が控え、王太子の横にはサブリーナが、固い決意を宿した表情で立っている。

一方、婚約破棄されたアデライトは突然のことに青ざめながらも何とか言葉を紡いだ。せっかくの卒業パーティーを、台無しにする訳にはいかない。名を呼ぶことは禁じられていたので敬称で呼びかけた。

「……殿下。私が至らぬのでしたら、謝罪します……これ以上の話は、別室で」

「これ以上？ 父子での横領について、ばらされたら困るからか？」

「なっ!？」

「王室助成金を使い果たし、更に父に金を横領させて贅の限りを尽くした悪女！ その悪事を誤魔化す為に、わずかばかりの金を民に配ろうとしたのだろうか？」

「そんな……私は、私達はそのようなことなどしておりませんっ」

「娘に濡れ衣を着せるのは、やめて貰おうか！」

「衛兵！ この者達を捕らえろっ」

「「はっ!」」

事実無根のことを高らかに宣言され、アデライトと娘を庇おうと現れたウィリアムは、反論しようとしたが——リカルドに命じられた兵士達によつて、捕らえられて押さえつけられ、跪かされた。罪人のように扱われたこともだが、せつかく父が用意してくれたドレスが皺になり兵士に踏まれたことにたまらずリカルド達を睨みつけた。しかし、リカルドにはハツと鼻で笑われてしまう。

「悪事を偽善で誤魔化そうなど、恥を知れ！ サブリナが、良案を思いついてくれた……彼女こそが、王太子妃に相応しい!」

「何を……」

「女の浅知恵でございます。でも、お金を使い込んだくせにあなたは何を仰っているの？ 民にとっては、落ちて着くまで税を払わない方が良いのよ」

リカルドに引き寄せられたサブリナが、良案とやらを告げるが——それよりも、勢いに任せてサブリナを新たな婚約者にしようとしていることに気づいて、アデライトは思わず声を上げた。

「哀れね」

だがその声は、サブリナに遮られた。そして一瞬、けれど確かにアデライトを嘲るようにサブリナは笑った。

そもそも、彼女達は横領などしていない。それ故、救いを求めてアデライトは会場の中に視線を巡らせる。しかし、リカルドの両親である国王夫妻はそんな彼女を一蹴した。

「……その罪人どもを、引っ立てよ」
「目障りです」

二人の言葉に愕然としたところで、アデライト達父子は兵士達に引きずられるようにして、パーティー会場を後にした。

邂逅

ドレスを脱がされ、靴や装飾品を奪われた。

そして、ボロ切れ一枚と裸足で地下牢に押し込まれたアデライトと父・ウィリアムは翌日、処刑されることになった。取り調べも裁判もない。国庫に手を出した、というリカルドの言葉だけで十分らしい。

(ああ、私にねだられたっていうドレスなどの請求書も、証拠になるのかしら……私の部屋には、買った筈のドレスもアクセサリーもないのに)

リカルドとサブリナにとって、いや、国王夫妻にとっても、王室助成金の使い込みに気づいたアデライト達は邪魔だったのだろう。毛布どころか、水すら与えられなかったアデライトはそう思った。しかし裸足のまま連れ出され、断頭台まで引つ立てられたところで別の目的にも気づいた。

「悪女め！」

「俺らの金を、横領なんてっ」

「お前らみたいな奴がいるから、あたし達が苦勞するんだっ」

民達から怒声が浴びせられ、石が投げられる。

……昨年の猛暑と嵐、そして虫害で民達は苦しんでいた。

そんな彼らの鬱屈の捌け口として、アデライト達は利用されたのだろう——彼らの中には、アデライトの寄付や炊き出しを受けた者もいる。しかし、そんなことなど今の彼らの頭にはないのだろう。

(皆、皆……何も知らうとせず、自分のことばかり)

彼らの為にならうと、思った自分が悔しかった。腹立たしかった。そんなアデライトに見せつけるように、まず父のウィリアムの首が落とされた。次いで、アデライトも断頭台に押しつけられて頭を乗せた。そして、その白い首に大きな刃が降ってきて――。

※

確かにあの時、アデライトは死んだ。

だが、気づけば彼女は生きている。しかも、子供の頃に戻っている。普通に考えれば、夢なのだろうが――とてもそうとは思えず、シヨックでその場に座り込んでいると。

「……思い出した？」

「っ!？」

不意に知らない声に話しかけられて、アデライトは驚いて顔を上げた。

長い髪は、淡い綺麗な紫色をしていた。こちらを見ている瞳も、同じ紫だった。

彼女に微笑みかけてきたのは声同様に知らない、けれどひどく美しい二十代前半くらいの青年だった。

「アデライト!」

「……おとう、さま」

「目が覚めたか……良かった……お前にまで、何かあつたらと思うと……」

「お嬢様!」

「ベレス侯爵、落ち着いて下さい。奥様の葬儀の後、二日も意識を失っていたのですから……まずは、診察を」

そんなアデライトと青年の間に、父親が割り込んできてアデライトを抱きしめてくる——いや、そもそも青年などいないかのように、話しかけてくる。それは、続いて飛び込んできた侍女も主治医である老人も同様で。

(……どうということ?)

戸惑うアデライトの視線の先で、部屋の壁にもたれて立っている青年は『内緒』というように、唇に人差し指を当てて笑った。

誓約

診察結果は、心労による発熱だった。熱や脈を測ったりされている中、アデライトは先程、父や主治医が口を滑らせた内容について考えていた。

母であるアンヌマリーが亡くなったのは、アデライトが七歳の時だ。そして、その喪が明けた頃に王宮でのパーティーに参加し、彼女はリカルドの婚約者となったのである。

（だから、今の私はまだ殿下の婚約者ではない）

それから、気になることはもう一つ。

診察中、紫の髪の青年はずっといたのだが、やはり誰もそのことに気づかなかった。診察が終わり、横たわったアデライトの枕元に、水差しとグラスを。額には濡れたタオルを乗せて、部屋から出ていくまでそれは変わらなかった。

……そして、アデライトは再び青年と部屋で二人きりになる。

「驚かない……のは、無理だと思うけど。声は我慢してね」

「……っ!?」

そう言う青年はふわり、と宙に浮いて長衣の裾を揺らしながらアデライトの近くまで移動してきた。魔法のないこの世界では、ありえないことだ。

当然、驚いたが——アデライトは言われた通り、手で口を塞いで何とか声を上げることができた。そんな彼女

に目を細めて、青年は浮かんだまま言葉を続けた。

「君の人生を巻き戻したのは、私だよ……君らの言葉だと、神、になるのかな？ もっとも何もせず、ただこの世界にいただけだから、人間が祈りを捧げている神とは違うけどね」

「……………」

「ありがとう……見てみたくなつたんだ。悪を知った君が、どう生きるかを。もっとも結構、世界に負担がかかったから、今後はほとんど干渉出来ないけどね。私の姿や声は、君以外には届かないし……ん？ 大きな声を出さないなら、どうぞ？」

そこまで黙って聞いたところで、アデライトは発言を求めて手を挙げた。それに神と名乗る青年が頷いてくれると、アデライトは口を塞いでいた手を離して祈るように指を組んだ。

「十分です。神よ、感謝します。彼らを滅ぼす機会を、与えてくれて……あの、私はアデライトと申します。お名前をお聞きしても、よろしいですか？」

「名前？ ないよ？ ずっと一人だったから、必要なかった……ああ、でも。しばらく君と過ごすなら、あった方がいいかな？ 好きに呼んでいいよ」

「え……」

さらりととんでもないことを言われて、アデライトはしばし考えた。そして小首を傾げるようにして、神を見上げた。

「紫の髪を初めて見ましたが、綺麗ですね。お母様に教えて貰った、薔薇のよう……ノヴァーリス……様は、どうでしょう？」

アデライトがそう言った途端、神の紫の瞳が軽く見張られ——次いで笑みに細めると、その額をアデライトの額を押し当ててきて言った。

「ノヴァーリスだね……気に入った。ああ、でも様はいらないよ？ 改めてよろしく、アデライト」

悪女と呼ばれた聖女が、聖女と呼ばれた悪女になるまで

発行日 2023年6月7日

著者 渡里あずま

<https://www.pixiv.net/member.php?id=45432486>

連絡先 contact@rainbow.sakura.ne.jp

印刷 シメケンプリント / Adobe Stock

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
